



日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association 2011.7 第44号



協会会長就任にあたって

一般社団法人日本SPF豚協会会長
全農畜産サービス㈱代表取締役

北島 克好

この度の、東日本大震災において、被災された皆さまに謹んでお見舞い申し上げます。一刻も早い復旧、復興を心よりお祈りいたします。

この数年、予想をはるかに超える飼料高騰（2007）、リーマン・ショック（2008）、口蹄疫（2010）、鳥インフルエンザ（2011）、そして今春の大震災と原発事故の発生は、私達を不安に落とし入れ、将来の見通しさえつかない厳しい状況が波のように押し寄せてきています。

このような中、昨年春、当協会の赤池会長が25年で区切りとしたい、と退任を表明されました。

しかし、当時、宮崎県で口蹄疫が発生し、終息の目途もつかないという非常事態であったことから、会長留任の強い要望が理事ならびに会員から出され、「1年だけの延長」という条件で翻意されました。

ところが、今年も3月に今まで経験したことのない大震災と原発事故が発生し、協会の会員農場においても多大の被害が発生し非常事態に陥っていることから、再度の続投をお願いしました。しかし、残念ながら退任の意志は堅く、今回は翻意できませんでした。

赤池会長の協会26年に亘る功績は、なんとといっても①任意団体であった協会を法人格まで引き上げ、組織体として整備されたこと、②認定制度を導入し広く定着させたことであり、本年3月末現在、認定農場数190戸、飼養母豚数7万7,495頭と日本国内の8.3%を占めるところまでに拡大・発展されたことです。

長年の会長のご努力、ご苦勞に対し、心より敬意を表し、感謝申し上げます。

そんな会長の後を受けるにあたり、四半世紀以上、赤池会長が先頭に立って会員の皆さまと築かれたSPF豚の歴史を重く受け止め、さらに発展させるため、微力ではありますが精一杯の力を尽す覚悟であります。

今回の総会で、協会の将来を見据えて体制を強化するため専務理事を設け、事務局長とともに事務局運営を図ることが承認されました。

また、協会の独自性と透明性を確保するため、これまでとおり行政の各関係機関、大学などの専門家、学識経験者の方々に、協会への内外からのご協力を継続してお願いしていきます。

現在、協会の抱える課題として、会員農場において、母豚1,000頭を超える企業経営の加入が増加したことで飼養規模の二極化が進んでいること、生産成績についても高位向上と低位安定の農場に二極化し、固定化が進んでいることがあげられます。また、会員の多様な要望に対して、協会がどのように対応していくのかも大きな課題になっています。

さらに、日本国内を中心として発展拡大してきた「畜産目的のSPF豚とその制度」が、競争激しいグローバルな養豚界において、どのように位置づけられるのか、将来も継続していけるのかを検証し、今後の進むべき道を探ることも大きな課題ではないかと考えています。

最後に、会員の皆様のご要望に応え、協会発展に寄与できるよう努力することをお誓いして、ご挨拶いたします。

2年ぶりに社員（代議員）総会を開催

事業計画など全ての議案を承認

本年度の定時総会（代議員会）は6月16日（木）、東京都千代田区のKKRホテル東京において開催されました。昨年は口蹄疫発生の影響で書面表決となり、集会は2年ぶりとなりました。昨年度の事業経過および決算報告、役員改選案、今年度の事業計画および予算案などすべての議案が承認されました。概略は次の通りです（会員の皆さまには議案および議事録をすでにお送りしてあります）。

22年度事業経過報告

平成22年度は梅雨時の豪雨、梅雨明けからの猛暑、恒常的円高、首相の交代、口蹄疫および強毒性鳥インフルエンザの発生、さらに追い打ちをかけるように東日本大震災と息つく暇もない年となってしまいました。協会においても地域研修会の無期延期、さらに、定時総会も書面による決議に変更せざるを得ない事態となりました。また、ちくさんフードフェアの出展も見送りました。上半期の活動は限定的となってしまいました。また、年度末に発生した東日本大震災は死者・行方不明者2万4,000人超という大惨事となり、壊滅的被害を三陸海岸沿いの町々に与えました。日本経済への影響は計り知れないものがあります。被災された方々には心よりお見舞い申し上げ、一日も早い復旧をお祈り申し上げます。

このような事態の中、協会はSPF豚農場認定制度を柱とした活動可能な事業に取り組みました。

認定農場の生産成績では生産指数が大幅に改善されました。特に、1母豚あたり年間肉豚出荷頭数の改善が顕著でした。さらに、肉豚出荷率の悪化にも歯止めがかかったと思われま

す。下期に入り、少し活動ができる環境となり、11月に日本SPF豚研究会との合同セミナーを開催しました。120名のご参加をいただきました。しかし、3月の理事会は中止としました。

認定シールの販売は710万枚（前年度比83.7%）となり前年度を大きく下回りました。協会オリジナルキャップとTシャツの販売、および、ポークリーフレットの配布も継続しております。

協会だよりは予定通り39号、40号、41号、42号を発行いたしました。

また、協会パンフレットの改訂版を制作し、配布しました。

なお協会設立40周年記念刊行物『ハイヘルス養豚への挑戦』は年度をまたぎましたが本格的な販売を行っております。

役員改選

今年度は理事・監事の任期満了に伴う改選時となります。

今回の改選では26年間その任を務められた赤池洋二会長が退任するのに伴い、新会長に全農畜産サービスピラミッドの北島克好副会長が選出され、就任いたしました。副会長には引き続き秦政弘理事（サンエスブリーディングピラミッド）が、新たに鈴木保理事（シムコピラミッド）がそれぞれ就任いたしました。

なお、赤池前会長は最高顧問に、さらに事務局体制強化のため藤田世秀事務局長が専務理事、事務局長に櫻町恭子事務局員が就任することが承認されました。

新理事・監事は次の方々です（順不同、敬称略）。

<理事>

北島克好（会長、全農畜産サービス(株)）、秦 政弘（副会長、(株)サンエスブリーディング）、鈴木 保（副会長、(株)シムコ）、山内一広（ホクレン）、田島 茂（伊藤忠飼料(株)）、大関輝男（日本農産工業(株)）、日浅文男（(有)道南アグロ）、石川輝芳（(農)しわひめスワイン）、林 寛康（(株)林商店）、下山正大（(有)下山農場）、船本秀和（(株)西日本ジェイエイ畜産）、西原 登（(株)ファームテック）、藤田世秀（会員外、協会専務理事）

<監事>

本野憲一（(株)ユキザワ）、工藤 修（全農畜産サービス
(株)東日本原種豚場）

23年度事業計画

防疫設備基準、防疫管理基準の徹底

新しいSPF豚農場認定規則および関連する基準、細則に基づき、厳格な運用を行います。

認定委員会の開催

SPF豚農場認定事業を推進していきます。認定委員会は例年どおり、6、9、12、3月の計4回開催します。

認定委員会の強化

認定委員会の中立性、透明性を確保するために認定規則を改正、構成をさらに明確にし、審査機関としてより強化します。

認定成績集計結果のフィードバック

引き続きSPF豚農場認定申請時に提出される生産成績を集計して、認定書発行時にこれまでの成績の推移を、また年度末に、各認定項目の順位表を、各ピラミッドを通じて農場にフィードバックしています。ベンチマーキングに活用し農場成績の改善に役立てていただきたいと思ひます。また、地域研修会等でも検討する場を設定したいと思ひます。

生産成績優秀CM農場の表彰制度の継続

例年通り、生産成績優秀CM農場を選考委員会により選定、セミナーで表彰します。

さらに新たな表彰の対象項目についても検討を加えていきます。

ピラミッド会議の設置

円滑な事業推進のため各ピラミッドによる担当者会議を開催、さまざまな課題や事業内容を検討します。

セミナーの開催

今年度のSPF豚セミナーは11月15日（火）、KKRホテル東京で開催予定です。内容についてはピラミッド会議で検討します。

地域研修会の開催

日時、場所、テーマはピラミッド会議で検討します。開催地域の優秀農場を中心にした技術情報交換等も



検討しています。

協会だよりの発行

協会だよりは43号（4月）、44号（7月）、45号（10月）、46号（1月）を発行します。

販促用資材の制作と普及

店頭用ポークリーフレット3種、協会パンフレットを引き続き希望会員に無料で配布します。さらに、認定農場向け協会オリジナルキャップとTシャツの販売を継続します。

SPF豚肉に対する正しい知識の普及

昨今、食の安全に対する関心の高まりに乗じて、必要以上にSPFポークの安全性を誇張した文言が食肉流通業界で目に付くようになっていますが、協会としては、すべての会員が一致協力してあらゆる機会をとらえ、SPF養豚の仕組みと生産情報がわかる、正しい「SPFポークに関する知識の普及」に努めます。

●イベントへの参加

・日本食肉流通センター主催「ちくさんフードフェア」(10月8(土)～9(日)、於：日本食肉流通センター)に一昨年に続いて参加します。

・アグリフードEXPOへの出展を検討します。

●SPFポーク販売店情報の収集・整備

関東圏を中心に販売店への訪問を実施します。集めた情報は「ちくさんフードフェア」で提供する予定です。

●認定シールの利用促進

ピラミッドと協力し、認定農場産シールの普及・拡大に努めます。

●SPF豚啓蒙用資材（パネル等）の制作と常設展示

制作方法、常設展示の実現性等についてピラミッド会議等で検討していきます。

浮腫病と離乳後下痢

東京農業大学教授 山本 孝史

浮腫病は、離乳後8週までの子豚が罹患することが多く、眼瞼周囲や前頭部皮下に浮腫が見られ、死亡率が50～90%に達する急性感染症です。離乳後下痢は、離乳後4～10日後に軟便～泥状便が見られ、死亡率は10%程度ですが罹病率は20～50%と高い常在疾病です。両者は一緒に発症することも多く、菌株によっては両方の病気を起こしますので本稿では一緒に記載します。

原因と発生要因

浮腫病の原因は、志賀毒素 (Stx) を産生し、宿主細胞への付着に関与する線毛 (F18) をもった浮腫病大腸菌 (edema disease *E. coli*: EDEC) です。離乳後下痢の原因は、下痢原性毒素であるエンテロトキシンを産生するETEC (enterotoxigenic *E. coli*) と呼ばれる大腸菌です。EDECのO群血清型は、O139やO141、ETECはO149等が多く分離されています。Stxは、ヴェロ (Vero) 細胞に毒性を示すことから以前はヴェロ毒素と呼ばれていました。EDECは、Stxのほかエンテロトキシンを産生する株もあり、このような株の感染では浮腫が見られず、下痢に続いてヨロヨロ歩いたり、後躯麻痺、斜頸のような神経症状が見られます。

浮腫病は、高タンパク飼料を給与している農場の発症率が高く、実験的にも粗タンパク量17%の飼料を給与された豚は全く発症しなかったのに対して、21%給与区では、約60%の豚が急性の浮腫病を発症したことが報告されています。また両疾病とも発育の良い豚が罹患しやすいことが知られています。浮腫病は雄の系統により発症率に差のあることが報告されていましたが、これはStxに対する感受性ではなく、F18線毛に対するレセプターを持つかどうかによることが明らかにされています。すなわち、レセプターを持たない豚はEDECが定着できず、したがって浮腫病に抵抗性を示します。さらにレセプターの有無は、ある遺伝子の変異による



豚の浮腫 (出典: 家畜疾病カラーアトラス・農水省)

ことが明らかにされて、この遺伝子を調べることにより抵抗性か感受性かが判定できるようになりました。以上のことに関連するのですが、中国在来種は遺伝的には感受性であるにも関わらず、浮腫病に罹りにくいのは成長が遅いからだという興味深い報告があります。

治療と予防

浮腫病では前述のように高タンパク飼料が発病に密接に関係しますので、発病の恐れのある期間は粗線維量を15～20%と高くします。両疾病とも一群の頭数を少なくする、群分け、移動を制限するなど離乳にともなうストレスを軽減することや制限給餌とすることも有効な予防法です。下痢発症豚に対しては、ビコザマイシンやゲンタマイシン等を含んだ経口補液が有効な場合もあります。一般に浮腫病や離乳後下痢の予防を兼ねてコリスチンの飼料添加が広く実施されていますが、耐性菌の出現や、浮腫病発症豚では菌の死滅により急激にStxが放出される結果、かえって症状が重篤化することに注意しなければなりません。生菌剤の効果はまちまちですが、さまざまな製品を大量に投与すると効果があったという報告もあります。

[参考文献]

1. Konstantinova, L. et al. (2008), Vet. Microbiol., 128, 160-166.
2. Bao WB et al. (2008), J. Anim. Breed Genet., 125, 427-430.



完全無薬豚生産へ再チャレンジ

有限会社ふなばやし農産
農場長 田中良市

有限会社ふなばやし農産（以降、当社と略します）は青森県十和田市にあります。当社は本場および第三農場の二農場体制となっており、両農場をあわせて母豚数約1,500頭規模の一貫農場として経営されております。従業員数は現在25名です。

SPF豚飼育への転換

当社は1985年よりSPF豚への転換を行い、現在、種雄豚および種母豚は全て（株）シムコより導入しております。

完全無薬肉豚生産への挑戦

当社は2005年より完全無薬飼育による肉豚生産への挑戦を開始しました。分娩舎で子豚が産まれてから肥育舎を経て出荷されるまで、肉豚は飼料添加物や動物用医薬品を含め抗菌性物質を一切与えられずに飼育されます。そうはいってもやはり病気になる豚は出てきますので、その場合は病豚を引き抜き治療の上、別豚房で別飼いし、無薬豚とは厳密に区別し有薬豚として出荷されます。

無薬豚生産のためには、まず最初に、一般的衛生管理の徹底に着手し、厳格なバイオリスクマネジメント体制を構築しました。具体的には豚群のロット管理、各豚舎のオールイン・オールアウトローテーションの確立、空舎期間の確保と徹底的消毒の励行などです。

また、「ワクチンで予防できる疾病は全てワクチンで予防する」コンセプトのもと、ワクチネーションプログラムを改善し、たとえば事故率が低いにも関わらずサーコウイルスワクチンをいち早く取り入れて成績安定を図ってきました。その過程で、不幸にしてPRRSの侵入を許してしまったこと、さらに豚増殖性腸炎が動いたこと等により、一時的に事故率の大幅な上昇に見舞われ、その対策に奔走せざるを得なかったこともありました。しかし、それらの試練を何とか乗り越



え、現在では完全無薬豚の出荷率が月平均で75%に達するまでとなりました。

震災を乗り越えて

このような中、ご承知のように、この度の東日本大震災によって、青森県内をはじめ東北地方の多くの方々が大きな被害に見舞われる事態となりました。幸いにも、当社は従業員および建物設備に大きな被害がなく、通常生産を継続・維持することができました。しかしながら、残念なことに飼料メーカー各社の生産設備が大きな被害を受け、無薬飼料の生産が不可能となり、無薬豚生産を一時断念せざるを得ない事態となりました。

しかし、飼料メーカーをはじめとする関係各位の絶大なるご協力のもと、今回の未曾有の事態を乗り越え、再び7月より無薬豚生産に再チャレンジできる態勢を整えることができました。もう一度、完全無薬豚生産へのチャレンジを通じて、消費者の皆様のご要望に応え、SPF豚コンセプトの一つでもある、安全で安心な豚肉の生産と供給に取り組んでいきたいと思っております。

最後に

当社農場の敷地からは、すぐ間近に八甲田連峰を望むことが出来ます。春から夏に移る時季には、八甲田の由来となった多くの峰々が残雪の純白に輝き、最も美しい姿となります。多くの山岳スキーヤーや登山者が訪れ、もっとも賑わう季節が始まります。また、すぐ近くには十和田湖や奥入瀬溪流などの自然美を有し、酸ヶ湯等全国的にも有名な数々の温泉地を擁する景勝地に当社はあります。当地にご来訪の折にはどうぞ当社にもお立ち寄り下さい。

二宮町は古くは東海道の宿場町として栄え、現在は東京・横浜に近く自然豊かな湘南の住宅地です。「肉の宮清」は国道1号線沿い、社長の宮戸清さんは横浜の肉屋を皮切りに修行を積まれ、昭和48年、生まれ故郷の二宮町に戻って精肉店を始められました。肉は枝肉仕入れ、脱骨からカットまですべて社長一人で、お惣菜やお弁当は奥様の昌江さんとお二人ですべて手作りされています。米は茨城県産コシヒカリを農家直送、国産にこだわりつつ価格も抑えています。注文が入れば定休日である日曜日に二人で100個ものお弁当を手作りすることも。お昼のお弁当もメインのおかずは作り置きせず、注文が入ってから揚げたり焼いたり。「時間との闘いです」(清さん)。

豚肉は20年ほど前からSPF豚にこだわり、現在は千葉の認定農場である下山農場産が中心。「肉のうまさはもちろん、脂がちがいます」と清さん。一度炊いてパック詰めし販売しているラードは真っ白で、甘い香りがたがいます。「このラードで揚げるコロケやとんかつが評判です。これじゃなきやだめ、とお客さんから言われます」と昌江さん。いただいた揚げ立てコロケはさっぱりとしてもたれず、さすがのおいしさでした。食を大事にし、味や質に敏



宮戸清さんと昌江さん

感な常連さんに支えられているといいます。一流レストランのオーナーシェフがおみやげにしたいからとわざわざ



ざコロケを買いに立ち寄ることもあるとか。「SPF豚のよさを知ったら普通の豚肉は使えないですね。惚れ込んで一生懸命売ってます」と清さん。リーフレットもお客さんによさを伝えるのに役立つと言っただけでした。飲食店に勤める息子さんが独立の暁には「SPF豚のとんかつとかコロケをメニューにしたい。それまでもう少しがんばります」。勤勉で誠実なご夫婦の姿に、心から敬服しました。

●認定情報●

●平成23年度認定農場

[6月認定] (有効期間:平成23年6月9日から24年6月30日まで)

北海道・(有)鈴木ビビッドファーム、青木ビッグファーム、(有)ゲズント農場、ホクレン滝川スワインステーション養豚技術センター、青森県・カワケンSPFファーム、同第三農場、岩手県・FVファーム、秋田県・(株)ナカシヨク八竜繁殖農場、同大口繁殖農場、同能代離乳農場、JA秋田しんせい肥育豚農場、山形県・(株)ナカシヨク庄内繁殖農場、同庄内肥育農場、同鶴岡肥育農場、福島県・(有)東和牧場、茨城県・(有)弓野畜産繁殖農場、同八郷農場、同千代田農場、(有)篠崎畜産、群馬県・JA東日本(株)利根スワインファーム、栃木県・(株)ノイバーン、千葉県・石毛宏司養豚、岡野朝雄養豚場、高橋幸雄養豚、塚本利昭養豚場、宮澤光男養豚場、(有)アグリ、吉田道養豚場、(有)藤崎農場松尾繁殖農場、

同飯岡肥育農場、江波戸SPF農場、(有)下山農場第2農場、新潟県・(株)ナカシヨク荒川繁殖農場、同中条離乳農場、同下田肥育農場、同長峰肥育農場、同上中山肥育農場、静岡県・(株)マルス農場、兵庫県・(農)八鹿畜産河上農場、同小田垣農場、鳥取県・(株)西日本ジェイエイ畜産名和農場、岡山県・岡山JA畜産(株)荒戸山SPF農場、愛媛県・富永養豚場、旭養豚場、(有)多田ファーム、佐賀県・JAさが富士天山ファーム、長崎県・JA全農長崎県本部五島種豚供給センター、(有)伊藤ファーム、浜田養豚、宮崎県・(有)レクスト、江夏商事(株)御池農場、クリーンファーム(株)、鹿児島県・(株)かいたく大口農場、鹿児島いずみ畜産(株)三笠農場

(以上54農場)

※次回認定委員会は平成23年9月8日(木)の予定

SPF豚の冷しゃぶラーメンサラダ

●レシピ提供・「豚料理よろずや」料理長 西澤一暢（北海道札幌市）

今年も例年以上の猛暑とか。とうがらしのカプサイシンと豚肉のビタミン（ブタミン）パワーで暑い夏を乗り越えるのにピッタリのレシピを教えてくださいました。

●材料●（4人前）

SPF豚ロースしゃぶしゃぶ用 200g
お好みのサラダ野菜
（サニーレタス リーフレタス
ミニトマト・カイワレなど） 適量
ラーメン 2玉

<ドレッシング>

みりん 250cc
はちみつ 60g
砂糖 100g
しょうゆ 250cc
酢 100cc
白いりごま 45cc
ごま油 45cc
うま味調味料 大さじ1
鷹の爪輪切り 小さじ1
おろししょうが 100g



●つくり方●

- ① ドレッシングのみりんを火にかけ煮きり、すぐに砂糖とはちみつを加えます。他の材料を合わせて冷ましておきます。
- ② 鍋にお湯を沸かし、ボウルに氷水を用意しておきます。
- ③ お湯が沸騰したら差し水をして、温度を70～75℃位に下げ、豚肉をしゃぶしゃぶし、ボウルに入れ氷水で冷やします。
- ④ ラーメンを少しやわらかめに茹でます。茹で上がったら冷水でしめ、水気をよく切ります。
- ⑤ 器にお好みの野菜を盛り、ラーメンと豚肉を盛り付け、ドレッシングをかけていただきます。

【西澤シェフからのアドバイス】

豚肉は75℃以上のお湯で加熱すると脂分が分解され、豚肉本来のうま味が全部逃げてしまいます。必ず沸騰後温度を下げしゃぶしゃぶします。ラーメンは少しやわらかめに茹でると食べるときちょうどよいかたさになります。

●協会からのお知らせ●

●代議員および認定委員の交代

伊藤忠飼料ピラミッドの代議員および理事が岩崎和也氏から田島茂氏に、日本農産工業ピラミッドの代議

員および理事が尾関紳一氏から大関輝男氏に、それぞれ交代しました。またシムコピラミッドの上大迫秀作認定委員に代わり、辻博史氏が就任されました。

編集後記 今年度はモチベーションを高く持って、一層の経営基盤安定化のため、生産性向上を図りたいものです。節電対策にも積極的に取り組みましょう。グリーンカーテン（キュウリ、ゴーヤ、ヘチマ、カボチャなど）やヨシズなどによる遮熱、照明機具のLED化、舎内でのミスト利用、屋根の遮熱工事、空調設備・換気扇等電気器具の整備など、まだまだあると思います。できるところから、実行あるのみです。定時総会において会長が交代いたしました。赤池前会長の長年のご貢献に心より感謝申し上げます。引き続き最高顧問としてご協力いただきことになっております。今後ともよろしく願います。（世）



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは

日本SPF豚協会の

登録商標です

日本SPF豚協会だより

第44号 2011年7月1日発行（季刊）

発行 一般社団法人 日本SPF豚協会
〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376
e-mail : j.spf.a@nifty.com
http://www.j-spf.com/

発行人 北島 克好
編集人 藤田 世秀



長い間、ご協力ありがとうございました

一般社団法人日本SPF豚協会前会長 赤池 洋二

東日本大震災で未曾有の災害に遭遇された会員の方々には、心からお見舞い申し上げますとともに1日も早い復興をお祈りしております。

さて、私は6月16日の定時総会をもって引退し、北島新会長（全農畜産サービス社長）にバトンタッチいたしました。1985年以来26年間、会長在期間中は会員の皆さまや関係者の方々から絶大なご指導とご協力をいただき、心からお礼申し上げます。

SPF豚を養豚産業へ応用する研究は、農水省家畜衛生試験場（現：動物衛生研究所）で波岡先生を中心に、1965年頃から始まりました。しかし、行政当局や養豚業界からはなかなか理解が得られず、SPF養豚の実現と普及には幾多の困難が予想されました。この未知の分野を正しい方向に導き発展させるため、SPF豚関連の技術開発を推進するとともに、SPF養豚方式の確立をめざして、日本SPF豚協会は1969年に設立されました。初代会長に有吉修二郎氏（アミノ飼料研究所長）、4年後の1973年には本田英三氏（住商飼料畜産社長）が二代目会長に就任されました。その頃、協会はSPF養豚の技術開発と普及が最大の課題でした。また、任意団体として設立された日本SPF豚協会の法人化は悲願となっていました。本田会長は協会の法人化のために奔走されましたが、行政や畜産関係者の無理解からくる反対意見が強く実現に至らず、本田会長の苦労が偲ばれます。そして1985年、本田会長が住友飼料畜産社長と協会会長を辞されたのにもない、私に三代目会長の重責がめぐってきました。

私は本田前会長の方針を踏襲するとともに、SPF養豚をより多くの関係者に知ってもらうことに取り組むことにしました。そして、セミナーの開催やイベントへの参加などを続けるうち、SPF豚の良さが養豚関係者や消費者に少しずつ理解されるようになってきました。この風潮に便乗して出現したのが、何の根拠もない自称「SPF豚」、「無菌豚」、「清浄豚」などです。農水省の「消費者の部屋」に問い合わせが多数寄せら

れるようになりました。協会ではSPF豚とSPF豚農場の基準を明確にし、それを制度に生かすこと、消費者の理解を深めることにつながると考え、SPF豚農場認定制度を1994年に発足させました。その効果は絶大で、自称「SPF」や「無菌豚」は姿を消し、真面目なSPF豚農場では衛生管理の改善や生産成績の大幅な向上をもたらしました。

次に取り組んだのが協会の法人化でした。法人化(財団法人、社団法人、協同組合、協業組合、事業組合、株式会社など)を検討しましたが、協会の活動に相応しい法人の姿が見えてきませんでした。しかし平成14年、「中間法人法」が施行されたことによって法人化への道が開けました。そして2004年、「有限責任中間法人日本SPF豚協会」として永年の夢が実現しました。2008年に中間法人法が廃止され、代って「一般社団法人および一般財団法人に関する法律」が施行されたのにもない、自動的に一般社団法人に移行し、「一般社団法人日本SPF豚協会」へ生まれ変わりました。今後は会員農場の成績向上・発展と新会員勧誘による協会の拡大が大きな課題となります。このような流れの中で、私が己の力不足にもかかわらず、会長の職務を重責に何とか耐えることができたのは、会員および関係者各位のご支援の賜物と深く感謝しております。

一方では、一人の人間が永年同じポストに居座ると組織のマンネリ化は避けられず、進歩が止まってしまうこともわかっていました。私は何年も前から会長交代を願っていましたが、協会の法人化、認定制度の見直し、口蹄疫の発生など、諸々の事情から延び延びになっていました。今年の総会において会長を辞任することが決まり、ようやくほっとしておりますが、今後は私にできることがありましたらお手伝いしていきたいと思っております。永年のご協力本当にありがとうございました。

日本SPF豚協会および会員の皆様の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。